

現代民主主義に関する一考察（完）

大 石 明 夫

<目 次>

ま え が き

一 ビュルドーの民主主義論の基本視角

二 「人民の権力」としての民主主義の変遷

三 現代民主主義の指標と、その問題性

（以上、名古屋大学『法政論集』第54号所収）

四 現代民主主義における「参加」の問題

（『中京法学』第10巻，第1，2合併号所収）

五 現代民主主義における「名望家」の問題（本号掲載）

五 現代民主主義における「名望家」の問題

ビュルドーによれば，現代民主主義の問題性をよりよく理解するためには，近代民主主義から現代民主主義への移行を体制の原理上の転換として認識することが必要であるが，その場合，かれが両者を識別する第二の指標としたのは，前者を政治的民主主義，後者を社会的民主主義と，それぞれ規定する観点であった。ビュルドーは，その『民主主義』，第四章において，¹⁾こうした観点から権力の本質について，また，より具体的に権力の基礎あるいは正当性，権力行使の目的，権力実現の態様といった諸問題について両者を比較し，その相異点を論じているが，それらについては，すでに本稿，第三節に概略を述べたところであり，²⁾ここでは後述との関連において次の点を指摘するにとどめたい。即ち，ビュルドーにとって政治的民主主義とは，何よりも個人の人間的諸自由，かれのいわゆる自由＝自立

を権力の侵害から擁護することを主眼とする体制であり、したがって、それは「国家統治 le gouvernement de l'Etat に関するのみであって、……個人については、これを間接的に問題とするにすぎない³⁾」。ところが、これに対して社会的民主主義は「……集団生活が形成される諸関係や諸活動のひとつひとつを統制することによって、社会全体の制圧をめざす⁴⁾」（傍点—引用者）ものとされるが、こうした社会的民主主義の体制的特質は、同体制下にあつて、かりにビュルドーが指摘した、権力の役割に関する觀念に大きな変化——それは価値の權威的配分から豊かな社会における繁栄の管理へと表現されていた——がみられたとしても何ら変るところがないであろう。それゆえ、近代民主主義から現代民主主義への移行を端的に示す指標のひとつは、結局、国家権力の活動領域における広狭ないしは深淺の問題に帰着するのであり、ビュルドーが『前掲書』の第五章でとりあげた「民主主義の社会化と、政治生活の諸条件の変容⁵⁾」の問題も、そこから派生するものと考えられる。本節のテーマは、現代民主主義における「名望家」の問題であるが、じつは、この問題に接近するための手がかりを与えてくれるのが、この第五章におけるビュルドーの問題提起であり、われわれの考察も、そこでのかれの所説を検討するところから始めなければならない。

民主主義の社会化が政治生活の諸条件にもたらす変容として、ビュルドーが第一にあげたのは「普遍的政治化」〈l'universelle politisation〉である。それはいうまでもなく、社会における自立的諸力 les forces autonomes を尊重し、社会から国家を分離する自由主義の原理に立つ政治的民主主義にあつて、国家統治の枠内にのみ限定されていた権力の活動領域が、社会的民主主義への移行にともない、次第にこの枠を越えて社会生活の諸分野に拡がり、ひいては「個人と集団のあらゆる行動 comportement が政治の領域に組みこまれる⁶⁾」現象をいうのであるが、ここで注目したいのは「普遍的政治化」の進行によって政治の觀念に何らかの変化が生じ、

それが個人の心情に対して深い影響を及ぼすというビュルドーの指摘である。つまり、政治的民主主義の前提にある自由主義の政治観からすれば、政治とは元来、特殊性ないしは専門性をおびた社会の一機能にすぎなかった。それが政治活動の目的における特殊化 *spécialisation* を意味するものであることはもちろんであるが、むしろ、より以上に「政治は人間のすべてに係わるものでなく、また、人間の行為が権力の定立した価値の尺度によって判断されるものでもない」⁷⁾（傍点—引用者）という観点を含意するものとされていたのである。ところが、こうした自由主義的政治観は、社会的民主主義の到来と共に一変せざるをえない。なぜなら、そこでは「政治活動によって生活を向上させ、社会の運命を明るくする任務を政治に負わせることが根本的に要請されている」⁸⁾からである。そして、そこにみられる政治観の変化、というより転換が個人の生活心情に対しても深い影響をもたらすことは当然であろう。かつて政治は「……運命の重荷から個人を軽くしてやるだけの資格を与えられず、それゆえ、それは特殊化された活動でしかありえなかった」⁹⁾。しかし、今や個人は「……みずからの希望を、ひとりでは手に入れることのできない幸福を与えてくれる権力に托する」¹⁰⁾のであり、それゆえ、かれにとって政治とは、まさに希望のモチーフ *les motifs d'espérer* を集約するものとなり、また、生きることの拠りどころ *une raison de vivre* ともなるのである。このように社会的民主主義にあって、政治があらゆる個人をとらえ、その全面的な自己投入 *engagement total* を要求することによって、はじめの特殊性を喪失するならば、政治はもはや、その専門家—政治家たちの専有物ではありえない。かれらと並んで「政治活動を職業としないが、政治が存在のひとつのあり方となったところの、政治化された大衆」¹¹⁾が大量に政治の舞台に登場し、かれらによって組織化され、操作されていくという新たな事態が到来する。そして、それが現代民主主義に寡頭制支配を成立せしめる要因になっていることとはいうまでもあるまい。

次に、民主主義の社会化が政治生活の諸条件にもたらした第二の変容と

して、ビュルドーは「個人の自立性の衰弱 <le déclin de l'autonomie individuelle>」をあげている。前述のとおり、社会的民主主義の下に「普遍的政治化」が進行し、そこから政治化された大衆が大量に登場するのであるが、この大衆を構成する個人は、元来、ビュルドーによれば¹²⁾定位された人間、即ち、環境に依存し、それによって一方的に規定される個人としての重み un poids individuel をもたない存在にすぎなかった。したがって、かれは、ひとりでは達成できない要求や願望を、境遇を同じくする他者と共同して集団を構成し、これを手段とすることによって達成しようとするわけである。ところが、ここでかれは予期しない重大な問題に直面する。それは「はじめ、かれが自己の力を他者のそれと合わせることによって無限に増大させる手段と考えた集団が、急速に自己から離れた力となり、その結果、集団が個人に奉仕せず、逆に個人が集団の手段になる¹²⁾」という問題である。この問題に内在する背理は、現実には、集団の一体性と有効性を確保するために必要とされる集団規律への個人の一方的服従により、また、その結果としての、一面における個人の自立性の衰弱と、他面における集団の社会的実体化の進行とによって処理されるのであるが、ビュルドーによれば、こうした事態を、集団を構成する当の個人が無自覚に受容し、あるいは、自覚はしても、かれが集団に期待する自己解放への希望の大きさからすれば、それはとるに足らないものとして受容され、事態をいっそう深刻にしているのである。

さらに、ビュルドーは、右に述べた個人と集団との関係にみられる価値の顛倒、いいかえれば集団内部の個人が集団規律への服従を強制されることによって、その自立性を衰弱させるというメカニズムが権力に対する個人の関係にも作用すると考える。それは、社会的民主主義にあって「現実的人民」によって構成される社会的諸集団が「事実上の諸権力」を保有するというビュルドーの所説からして、当然の帰結であるといえるかもしれない。しかし、ここでかれが問題としているのは、そうした広い範囲の権力一般ではなく、とくに¹³⁾国家権力に対する個人の関係であることに注意し

なければならない。その場合、かれによれば、国家権力によって個人の諸要求が何らかの具体的な権利として客観的に承認され、法制化されるということは、定位された人間としての個人が位置づけられている、さまざまな社会的座標 *coordonnées sociales*——例えば熟練労働者とか小農経営者など——にしたがって非個人的な枠組 *un cadre impersonnel* のなかへ組み入れられることに他ならず、この意味において、国家権力が個人の諸要求を法制化することによって得られた諸権利は、逆に個人から、その「個性を剝奪する ¹³⁾ *«désindividualisent»*」のであり、また、それによって国家権力は、個人の「……自由としての権利 *droit-liberté* を機能としての権利 *droit-fonction* に転化する」¹⁴⁾ ことにならざるをえない。これを要するに、民主主義の社会化による「個人の自立性の衰弱」とは、定位された人間としての個人が「普遍的政治化」の下にあって、みずからの境遇を改善するため、かれのすべてをあげて政治に期待し、これに係わるどころから得られる「何らかの償いや慰め」¹⁵⁾ に対して、かれが支払わざるをえない代償をいうのであり、それは前述のとおり、集団による個人の手段化であれ、国家権力による個人の非個性化であれ、ビュルドーにとって「古典的個人主義が、これまで人間の人格を飾ってきたあらゆる特権の放棄」¹⁶⁾ につながる、あまりにも貴重な人間的価値の喪失を意味していたのである。

政治的民主主義から社会的民主主義への移行にともなう、政治生活の諸条件の変容と、その問題性についてのビュルドーの所説は、かれが第三の変容として指摘した「諸政党の変容」*«transformation des partis politiques»*¹⁷⁾ を別にすれば、ほぼ以上に要約したとおりであるが、それでは、われわれは、このようなかれの問題提起を現代民主主義における「名望家」の問題と関連させて、どのように受けとめるべきであろうか。「普遍的政治化」によって政治と社会との分離が消滅し、社会における個人の日常的営為がすべて政治的に意味をもち、政治的に評価されるというビュルドーの指摘は当然である。しかし、問題は、かれも重視したように、個人が日

常的営為の政治化という客観的な過程の進行を前にして、これにどのように係わるのか、その内面的な係わり方にあると思われる。この点、ビュルドーは、個人を環境に定位された人間としてとらえる、かれの人間観からして明らかなとおり、「普遍的政治化」を基本的には個人が主体的・能動的に政治に関与し、それによって環境を改変していく過程としてではなく、逆に個人が客体的・受動的に政治に巻きこまれ、環境への依存度を深めていく過程として把握しているのであり、また、かれが現代国家、それは今や豊かな社会の繁栄を管理する国家とされているが、その下であって、政治が個人の全面的な自己投入を要求するという場合にも、これに応じて個人がみずからの諸要求の実現を、あげて政治に托するとき、個人を内側から支える発条は状況変革への内発的な欲求ではありえず、権力への受益者的期待感にすぎないと解さざるをえない。

一般に、現代国家の、いわゆる大衆社会状況における個人の政治意識を問題にする場合、その肯定面・否定面のいずれを重視するかは、いうまでもなく論者のイデオロギー的選択の問題に帰着するであろう。しかし、いずれの側面を重視するにせよ、少なくとも、その一面のみを不当に拡大してはならないということ、つまり、対象をその両面性においてとらえることが必要である。この点、ビュルドーは、その否定面を重視するあまり、現代民主主義の問題性ないしは、その将来への展望について悲観的に過ぎる見方に陥っているといわざるをえない。そして、こうしたかれの見方は、より具体的には、かれが集団と国家に対する個人の関係について、先ほど述べた「個人の自立性の衰弱」を論ずるとき、いっそう顕著であるといえよう。そもそも政治権力の侵害から個人の人間的諸自由、かれのいわゆる自由＝自立を保全するところに政治体制としての民主主義の究極的な存在価値を見いだすビュルドーにとって、この「個人の自立性の衰弱」がどれほど深刻な問題として受けとめられているか、それは例えば、先にその一部を引用したところの「諸要求としての権利 *droit-exigences* の実現とひきかえに、社会的民主主義は、かつての自由としての権利を機能としての

権利に転化する¹⁸⁾」という言葉からも窺い知ることができるし、また、そうした状況下にあっては、前節でとりあげた「参加」の問題も、かれにとって「……支配者が企業家となってつくりあげる新しい社会秩序の建設のための、すべての個人の義務的な参加 participation obligatoire¹⁹⁾を意味する」(傍点—引用者)にすぎないものとなる。

ところで、先にも指摘したとおり、社会的民主主義の下における「普遍的政治化」が、いわばその不可避的な結果として「個人の自立性の衰弱」をもたらすという、ビュルドーのこうした見方は、あまりにも悲観的であり、われわれは、そのすべてに賛成することはできない。なぜなら、そこからの帰結は、かれのいわゆる「人民投票的民主主義」の是認以外の何物でもないからである。しかし、ここでもわれわれは、対象を一面的にのみとらえることを控えねばならず、ビュルドーの問題提起の積極的な側面を、それなりに評価するべきであろう。今や、社会化された民主主義としての現代民主主義が前提としなければならないのは、複雑・高度化した産業・情報社会であり、また、これを管理・統制する巨大な国家的・超国家的権力機構である。そして、こうした国家・社会の微細なある一点に定位された人間としての個人が、客観的過程としての「普遍的政治化」の進行に巻きこまれ、受動的にのみ政治化されるとき、かれは容易にその個人としての自立性を衰弱させ、喪失せざるをえないことは自明の理ですらあるともいえよう。しかも、みずからの自立性を喪失する当の個人が、これを自覚することもできないというビュルドーの構図は、現代民主主義のイメージとしては出口のない、あまりにも暗い構図であるが、それがやはり、われわれの日常的経験に照らして真実の、少なくともその一面をとらえていることは否定できない。そこで、われわれにとって必要なことは、こうしたビュルドーの構図を頭から無視し去ることではなく、それを組立てている諸要素のある一点を打破って、そこから将来への展望を切り開きうる視点をうちたてることでなければならない。それは端的に言って、かれの現代民主主義論の基礎にある人間観、即ち「定位された人間」として個人

をとらえる人間観を再検討することを措いて他にないであろう。

人間は、その具体性において、ある特定の環境に定位され、それに規定されざるをえない存在である。その意味では、かれはビュルドーのいうとおり「個人としての重み」をもたない存在にすぎないかもしれない。しかし、かれは同時に環境によって規定されながら、逆に環境に対して働きかけ、これを改変する可能性を秘めた主体的・能動的な存在でもあることは、これまでの人間的営為のすべてがこれを証明するところである。現に近代民主主義の思想と運動は、そうした主体的・能動的な人間、即ち市民としての人間像を前提にして、はじめて成り立ちえたといえよう。ビュルドーはただ、これを抽象的理念によってのみ措定されうる人間、かれのいわゆる「設定された人間」²⁰⁾として、その実在性を認めなかったものであるが、われわれが現代民主主義の展望を切り開くうえで必要なことは、こうした市民的人間像の抽象性を克服して、これに実在性を与えること、逆にいえば、ビュルドーの「定位された人間」の一面をなす受動性・被規定性を「設定された人間」の能動性・秩序形成性によって補完するところにあるのではなかろうか。繰返していえば、環境によって規定されながら、同時に環境に対して働きかけ、これを再構成しようとする人間、集団や権力に対して客体的でありながら、同時に主体的でもあろうと努力する人間、これこそ歴史の創造者として、現代民主主義がわれわれに要請する人間像＝市民的人間²¹⁾に他ならない。

それでは、こうした市民的人間の形成は、ビュルドーが指摘した現代民主主義のきびしい問題状況にあって、具体的には、どのようにして可能であろうか。それは、やはり前節に述べた、多様な形態の下における個人の政治参加の実践を通して、はじめて可能であるとししかいいようのない、いわばルソー以来の難問であろう²¹⁾。しかし、ここで注目したいのは、環境に定位された人間として受動的にのみ政治化され、したがって、容易に権力による操作の対象とされていく個人に対し、その内面の奥深いところに働きかけることによって、そこに潜在する真に内発的な能動性への契機を触

発し、かれをして積極的な政治参加へ向かわしめる、その触媒としての役割が期待される先駆的市民層の出現という事実である。その場合、具体的には、すでに本稿、第三節に指摘した既成の諸政党および、その他の職能的・圧力団体的諸集団の枠外に形成された各種市民的諸団体・クラブの活動を推進した、リーダーないしはサブ・リーダー層が念頭にあるわけであるが、今かりに、こうした先進的・活動的な市民層を現代社会・国家における新しいタイプの「名望家」層と名付けるならば、われわれは、現代民主主義の問題点のひとつを、そこでの新名望家層の機能あるいは、その役割の問題として設定することができるのではなかろうか。しかし、もちろん「名望家」概念を、いきなり現代民主主義の問題に結びつけることには疑問もあり、その使用にあたっては、あらかじめ名望家概念についての一応の整理と限定とが必要であろう。

この「名望家」という、かなり曖昧な概念を一応、ある特定の時代と社会において、その経済的余裕と社会的威信にもとづき、顕著な政治的影響力を発揮した個人ないしは、その集合体を指示する用語であると規定することには、おそらく異論はないであろう²²⁾。しかし、そのより厳密な規定ということになると、そう簡単ではないようである。例えば、フランスの場合について、歴史学者のテュデスクによれば、それは、ほぼ18世紀後半から19世紀の大部分の時期にかけて政治・経済・社会の各方面にわたり、広く国家的規模において国民を指導し、とくに制限王政期（1815年—48年）には直接、国家権力の一翼を担い、あるいは単独でこれを掌握したところの、上層ブルジョアジーと新旧貴族層との融合体、即ち、かれのいわゆる指導的カテゴリー *une catégorie dirigeante* としての社会集団であるとされている²³⁾。ただし、この規定は、テュデスク自身も認めているとおり、大名望家についての規定であって、爾余の地方名望家を対象としたものではない。かれの著名な『フランスにおける大名望家（1840年—1849年）』²⁴⁾も、このように大名望家を地方名望家から区別する観点に立って書かれて

いるのであるが、それはさておき、かれの名望家論が名望家概念を基本的には歴史学の範疇に属するものとしてとらえ、その形成から解体に至る歴史的過程——それは先に述べたとおり、旧体制末期における封建身分社会の動揺から、19世紀の80年代における近代階級社会の確立までの長期にわたる過渡期に相当する——を前提にしていることは明らかである。

ところが、これに対して社会学者のグレミオンは、その『権力の末端——フランスの政治体系における官僚と名望家——²⁵⁾』において名望家概念の社会学的・機能論的理解の重要性に着目し、権力の社会的基礎を考える場合、歴史学的概念としての名望家層が、その存立の歴史的条件を喪失して解体したはずの19世紀末以降にあっては社会学的・機能論的概念としての名望家層は、集権化された近代官僚制国家を支える地方政治—行政体系 *le système politico-administratif local* に不可欠の構成要素として、なお有効な役割を果たしている²⁶⁾と主張する。例えば、かれが名望家について、それは「……国家規範 *la règle centrale* の普遍主義に対する違背 *une transgression* を地方行政からひきだすに足る代表性をもち、かつ、この事実²⁷⁾に依拠して国家と市民社会との間に介在し、両者を媒介する戦略上の要地を占める個人である」(傍点—引用者)と述べる²⁸⁾とき、かれは明らかに名望家を、その代表機能と媒介機能によって定義しており、また、こうした定義づけが名望家概念の歴史学的理解との相異を自覚したうえでなされている点についても、例えば、かれが名望家の媒介機能に関連して「名望家の権力は、今では地方官僚制の末端部と地方公共団体の代表者とが交叉するところに展開される。歴史学者たちが官僚制化と名望家制化 *notabilisation* との間に否定的な関係をみるところに、われわれは肯定的な関係を見いだす。……名望家制化は官僚制の活動と肯定的に結びついている²⁸⁾」と述べているところから容易に推察することができるのである。これを要するに、グレミオンの名望家論は、名望家を基本的には産業社会への移行にともなう、その指導性あるいは、その影響力を徐々に失っていった伝統社会のリーダーと規定する従来の歴史学者による名望家概念——かれによれば、

それは「官僚制」と「合理化」に関するヴェーバー理論のフランス社会への適用に他ならない——²⁹⁾の歴史学的被制約性を指摘しながら、その社会学的・機能論的理解を通して結論的には、名望家が現代フランスの政治＝行政体系にあっても、なお「……国家と国民を、つまり統一性と多様性を接合する蝶つがいとしての戦略的地位を占め、その限りにおいて、それは、きわめて枢要な国民統合機能を発揮している」³⁰⁾ことを認めようとするものである。

さて、以上に述べた名望家概念についての簡単な整理から、われわれはまず、歴史学的概念としての名望家層が19世紀の80年代——それはフランスにおいて伝統社会から産業社会への移行が完了し、政治的には、第三共和制下にあって普通選挙制がはじめて定着すると共に、都市小ブルジョアジーおよび地方農民を主体とする、いわゆる新しい社会階層 *une couche sociale nouvelle*³¹⁾の共和化が進捗し、かれらによって支持され、ガンベッタやクレマンソーに象徴される急進派 *radicaux* が擡頭した時期である——³²⁾を下限として、その指導的カテゴリーとしての歴史的使命を終えたものである以上、これを現代フランスの民主主義の問題に少なくとも無限定にもちこむことは時代錯誤であり、概念の不当な濫用に他ならないということを認めざるをえない。しかし、次に、それにもかかわらず、ここで確認しておきたいのは「階級現象 *phénomènes de classe* に対する権力現象 *phénomènes de pouvoir* の自立性」³³⁾を認め、「名望家の権力は、与えられたある時代の階級構造にではなく、恒久的な国家構造に結びつけられている」³⁴⁾とする基本的観点から現代フランスの国家構造、より具体的には第五共和制下の地方政治＝行政体系における名望家層の機能・役割を実証的に観察して、そこから社会学的・機能論的名望家概念の有効性を抽出したグレミオンに依拠するならば、われわれの課題である現代民主主義の問題性の考察に名望家概念をもちこむことは、それ自体としては十分可能であろうということである。

ただし、これに関連して、なお一言、付け加えておきたいのは、前述の

とおり第五共和制下のフランスにあって、その代表機能と媒介機能により、そこでの地方政治＝行政体系に不可欠の構成要素とされている名望家とは、実際にどのような人びとを指しているのか、つまり、現代フランスにおける名望家機能の担い手は誰か、という問題である。これについては、名望家の機能に関するグレミオンの所説からもおよそ察しがつくと思われるが、かれらは要するに中央に対して地方を代表し、地方官僚制を通じて提示される国家の権力意志を、これに何らかの修正を加えながら地域社会に媒介することのできる人びと、つまり、具体的には県・市町村のそれぞれの地域住民の選挙によって、直接・間接に選出された各地方議会の議員や市町村長であり、さらには、かれらの周辺に位置する地方有力者といった人びとである。そして、少なくとも第五共和制の発足当初から1960年代末にかけて、かれらの多数が党派的には依然として「……それに先行する体制（第四共和制）の活動、即ち、MRP（人民共和派）から急進社会党を経てSFIO（旧社会党）に至る中道左派連合の活動を確保してきた政治階級³⁵⁾」（括弧内＝引用者）に属する人びとでもあったことは、グレミオンもこれを指摘するところである。したがって、かれらは、一面において発足当初の新体制＝第五共和制の地域社会への定着と、そのために必要とされる新たな地方エリート層の育成とを図る政府・多数派＝ドゴール派の政策意図にとって一掃されるべき障害要因となり、また、他面において現体制＝ドゴール体制を民主主義を抑圧する個人独裁制として拒否すると同時に、もはや第四共和制への復帰も願わず、これを支えた中道派ないしは中道左派的諸政党の枠外にあって、フランス民主主義の再建と、さらには社会主義への接近を志向する左翼諸勢力にとっても、かれらは刷新されるべき恰好の攻撃目標となるのである。

こうして現体制＝ドゴール体制下の名望家層は、その客観的機能によって、そこでの地方政治＝行政体系に不可欠の構成要素となりながら、しかも、その保守的・守旧的性格のゆえに左翼の反体制派からはもちろん、体制派からも攻撃されるという奇妙な立場におかれることになるのである。

が、グレミオンは、この点について、元来、名望家が保守的なものとして現われるのは、かれの思想や態度によるというより、むしろ、かれが名望家という地位におかれている事実そのものに由来すると考え、そこから名望家の社会的・機能論的理解の必要性についての、みずからの主張を展開していくわけであるが、ここではもはや、それに立ちいる必要はあるまい。ただ、念のため、最後にもう一点、指摘しておきたいのは、かれが考察の対象とした、第五共和制下における名望家機能の担い手——それは上述したとおり地方的・保守的であり、党派的には第四共和制時代と同じく、主として中道派的ないしは中道左派的諸政党に属する人びとである——が、先にわれわれがその現代民主主義における政治的役割を高く評価した先進的・活動的市民層としての新名望家層とは、その概念内容において全く別個の存在であることはいうまでもなく、したがって、両者は混同されてはならないということである。

さて、長くなってしまったが、以上に述べた名望家概念についての予備的考察を前提としながら、以下のところでは、現代民主主義における「名望家」の問題を、これも本節のはじめに指摘した問題意識にもとづいて、そこでの新名望家層の機能ないしは、その政治的役割といった角度から考察するわけであるが、その場合、先ず本稿、第三節の最後のところで指摘した、ロヴァンの『新しい理念としての民主主義³⁶⁾』をとりあげ、そこに述べられた著者の名望家論を参照しながら、われわれの考察を進めることにしよう。

本書は、19世紀初頭から第五共和制の発足に至るまでのフランス民主主義の発展過程を、いわば名望家概念をキー・ワードとすることによって概観した前半部＝「総括」〈inventaire〉篇と、そこからフランス民主主義の将来を展望し、その可能性を探求した後半部＝「建設」〈construction〉篇との二つの部分から成り立っているが、この後半部においても、ロヴァンのいわゆる新名望家層 *les nouveaux notables* に期待される民主主義的

役割が重視されており、したがって、本書の全体を通じて、かれの民主主義論には名望家概念が重要な意味を与えられているといわなければならない。

そこで、われわれとしてはまず、かれのいわゆる名望家とはどのような概念であるのか、これを明確にしておきたいのであるが、じつは本書に、その一般的な定義づけらしい記述は見当らない。それは本書が、そもそも著者ロヴェンの個人的な政治的信条の表白として、あるいはフランス民主主義の発展のための政治的プログラムとして書かれたものであるという性質上、当然のことかも知れない。したがって、われわれは、本書の随所にみられる名望家についてのロヴェンの記述の断片から、これを推測せざるをえないのであるが、例えば、かれは、1850年当時のフランスにあって、表面的には普通選挙制が有権者を飛躍的に増加させていたにもかかわらず、その実態において、フランスは依然として制限選挙制的体制下におかれていたと指摘し、³⁷⁾「代議制は相変らず50万にも満たない人びと、かれらは財産、知識、教育、社会的尊敬によって無名の凡人よりも一段と高いところに立っていたのであるが、こうした人びとの枠のなかでのみ動いていたにすぎない。フランスの人民は、じつのところ *effectivement* 名望家たちによって代表されていたが、それは、フランス人民の生活の仕方や物の考え方・感じ方が、なおみずからを自主的・直接的に表現することができない状態におかれていたからである」³⁸⁾（傍点—原文イタリック）と述べ、また、当時の名望家たちも、こうしたフランス人民の政治的未成熟を意識的に利用することによって、普通選挙制の下にあっても、なおかつ、かれらの階級的利益を貫徹させることができ、その限りにおいてのみ民主主義を受容しえたにすぎないとして、次のように述べている。「名望家たちの利益は制限選挙制を必要としていた。かれらの利益が、どうにか普通選挙制の民主主義と妥協することができたのは、……かれらが媒介 *médiation* という手品を使って、この民主主義の現実をごまかし、隠すことによって³⁹⁾であった」（傍点—引用者）。

さて、これらの引用文から、さしあたって指摘できることは、ロヴァンもまた先に紹介したグレミオンと同じく、名望家を機能論的に理解する観点に立ち、その機能を代表機能と媒介機能に見いだしているという点である。そして、ロヴァンのこうした観点は、19世紀中葉の名望家——それはいうまでもなく、テュデスクがとりあげた大名望家＝伝統的名望家に相当するわけであるが——に限らず、例えば、以下に引用するかれの記述からも明らかなとおり、第五共和制下の新名望家についても何ら変わるころがない。即ち、これを先ず代表機能についてみるならば、かれは、同体制下の新名望家に期待される具体的諸機能を論ずるところで「新しいオピニオン・リーダーたち（この場合、ロヴァンは、この語を新名望家と同義に用いている）は、仲間の市民から信頼という資産を授けられ、市民に対して何らかの影響力を及ぼす。かれらは卓越した知識と経験をもち、……かれらが代表する環境にあって、そこに広がる感情・要求・意見を方式化し、表現するうえでしばしば先天的な才能を所有する。……かれらは代表と表現、解釈と伝達、活動と激励 **animation** といった、さまざまな機能を同時に発揮する」⁴⁰⁾（傍点—原文二重括弧、括弧内—引用者）と述べており、次に媒介機能についても、民主主義の理念がみずからを実現するためには、つねに技術的＝物的媒体と共に人的媒介者 **médiateurs** を必要としているにもかかわらず、それが十分に形成されていないところに現代フランスにおける民主主義の問題性を見だし、⁴¹⁾「それ（フランス民主主義の現在の危機）は、われわれにとって、すでに活動の時代を終え、あたかも脱皮したあとに残された蛇のぬけがらのように社会の進展にとり残された名望家制に替えて、新しい名望家制を代置するところにあると思われる。実際、名望家、つまり媒介者というものは、他のあらゆる政治生活の形式にもまして、民主主義に生きようとする社会にとって必要な器官である」⁴²⁾（傍点・括弧内—引用者）と述べている。

これを要するに、ロヴァンの名望家概念は、グレミオンのそれと同じく、基本的には名望家の機能論的理解によってフランス民主主義の発展過

程における名望家層の政治的機能に注目し、これを代表機能と媒介機能に求めたものであるが、しかし、ここで注意しなければならないのは、かれがグレミオンの場合とは異なり、その名望家概念に機能論的観点と共にテュデスクの歴史学的観点をもとりいれているという点である。つまり、グレミオンの名望家概念が、その歴史性を捨象された集権的統一国家において、そこでの権力意志の実現に名望家層がどのような政治的機能を営み、これに貢献するのか、といった問題を一般的に考察する観点から構成されていたとするならば、ロヴァンのそれは、大革命以後のフランス名望家層の政治的機能を、そこでの民主主義の発展と関連させて歴史的・個別的に考察する観点から構成されているといえよう。したがって、かれの民主主義論にあっては当然、フランス名望家層の歴史的変遷過程が重要なテーマになるわけであるが、これについては必要に応じ、後述することにして、ここでは次の点を補足するにとどめたい。

それは先ず、名望家機能について先に引用したロヴァンの記述に示されていたとおり、かれがフランスの名望家層を新旧二つの歴史学的カテゴリーに大別し、ごく大ざっぱにいて、フランス民主主義の発展過程を旧名望家層——それは、大革命と第一帝政後の混乱したフランスに制限選挙制にもとづく議会政治を確立し、1848年に普通選挙制が実現された後も、逆にこれを利用することによって、ほぼ19世紀末に至るまで政治・経済・社会の全領域にわたってフランス人民を指導し、あるいはこれを支配した社会集団であり、テュデスクのいわゆる大名望家層に相当するものと考えてよい——ないしは20世紀以降における、その後継者たちに対する新名望家層——ロヴァンによれば、これも20世紀になってはじめて現われるものではなく、すでにパリ・コミューンに際して民主主義の新しい形態を模索したコミューンの指導者たちに、その最初の明確な発現を見いだしうるのであるが、それが旧名望家層に代ってフランス民主主義の重要な担い手となるのは、やはり20世紀以降であるとされている——の対立・抗争の過程として把握しようとしていることである。

次に、これに関連して付け加えるならば、ロヴァンの場合、かれが名望家機能の担い手に新旧二つのカテゴリーを認めたところから、名望家の一般的機能としての代表と媒介の機能にも、それらの具体的な発現態様において担い手の相異にもとづく微妙な、しかし、根本的な違いが生ずるはずである。この点、例えば19世紀7,80年代の状況について、ロヴァンは「第三共和制の名望家たち（旧名望家層）は、……歴史以前の暗闇から脱け出たばかりの無数の大衆を超越した高所に立ち、民主主義に対する抵抗のみならず、民主主義そのものをも支配する。ところが無限のイデオロギー的熱情に鼓舞され、また、新しい社会的諸利益を表現する共和主義的な新名望家たちは、……民主主義的現実をめざして不断に前進する制度的・社会的・道德的・知的諸条件をつくりだす⁴⁴⁾」（括弧内・傍点—引用者）と述べている。つまり、この引用文に示されているとおり、それに名望家機能の説明として先に引用したところからも、われわれは同様の趣旨をよみとることができるのであるが、ロヴァンによれば、旧名望家の場合、その機能は、大衆を超越した高所から、かれらの政治的自立と権力への参加を抑圧する寡頭制的・権威主義的方向に、つまり端的に言って反民主主義的方向に作用するものであるのに対し、新名望家の場合、それは、相互信頼により大衆と密着したところでかれらの政治的自立を助長し、その社会的諸利益を政治に媒介する民主主義的方向に、基本的には作用するものとされているのである。

以上、われわれは、ロヴァンの民主主義論における名望家概念をとりあげ、テュデスクやグレミオンのそれと対比しながら、これを構成する諸要素を摘示することによって、そのアウトラインを画いてみたが、われわれが最も関心をもたざるをえないのは、やはり主題との関連上、ロヴァンのいわゆる新名望家層が、フランス民主主義の発展過程において具体的には、どのような政治的機能を営んできたのか、また、より以上に、将来の問題としてフランスの民主主義を、かれの表現によれば「一段と高い段階に」⁴⁵⁾引き上げるために新名望家層に期待される役割は何か、といった問題に他

ならない。

先ほども指摘したとおり、ロヴァンによれば、はじめて伝統的名望家層＝旧名望家層に対し、新しいタイプの指導者たち *un type de dirigeants nouveaux*＝新名望家層を出現せしめたのはパリ・コミューンであったが、その後、フランスには最右翼に位置する正統王朝派からオルレアン派、日和見派 *opportunistes* を経て、一部急進派に至る各党派が重層的に包含され、相互に抗争しながらも一箇の支配階級としての名望家層を構成し、それが全体としては漸次、共和主義化することによって普通選挙制にもとづく議会共和制を定着させ、その結果、D. アレヴィのいわゆる名望家の共和国 *la République des Notables*＝第三共和制が確立する。⁴⁶⁾そして、この「第三共和制を創設し、強固なものにしたブルジョア名望家たちが、……しばしばきわめて意識的に教育を普及すると共に情報の諸手段の発明と、その伝播を促進し、また、名望家層を民主化することによって名望家制そのものの解体を準備し、実行したところにかれらの民主主義への貢献を認める⁴⁷⁾」というロヴァンの指摘にももちろん異論はない。しかし、われわれがより以上に注目したいのは、ほぼ1900年ごろ、具体的には、かのドレイフュス事件を歴史の大きな曲り角として、それまでもっぱら名望家層によって媒介された *médiatisée* 民主主義が、その頂点を過ぎて次第に退落するというロヴァンの見解である。

即ち、かれによれば「ドレイフュス事件以後になると、フランスは（第三）共和制発足当初のイメージとは、もはや全く似ても似つかないものとなる」⁴⁸⁾（括弧内—引用者）が、それは一面において、公教育制度の創設と、その急速な発展による若い世代からの文盲の一掃、新聞その他の出版物の普及ならびに、それを保証する出版自由の原則の確立、さらには、より多数の読者への出版物の伝達を容易にする技術上の進歩といった一連の事実によって⁴⁹⁾「……情報面での名望家たちの媒介が以前ほどには必要でなくなり、また、それにともなって一般選挙人の方も、かれらへの依存度を弱める⁵⁰⁾」

に至った結果であるといえよう。しかしながら、われわれは、他面において、こうした退落傾向が次の事情にも関わっていることを見逃してはならない。つまり、それはドレイフュス事件を経過するなかで、上記のブルジョア名望家層に対抗する勢力として新たに反体制・社会主義を志向する指導者たちの中央・地方における擡頭が顕著にみられる事態をいうのであるが、ロヴァンは、こうした新しい指導者層の擡頭という事実に着目して、これを既存のブルジョア的旧名望家層に対する労働者的新名望家層の形成を意味するものとしたのである。

したがって、すでに指摘したところの、フランス民主主義の発展過程を基本的には、新旧二つの名望家層の対抗関係によって把握しようとするロヴァンの図式が、この時期になってはじめて明瞭なかたちをとって成立するわけであるが、この図式の、その後の具体的な発現態様については次にとりあげることにして、とりあえずここで指摘しておきたいのは、かれがこの時期における新名望家層の形成について述べるとき、そこでの労働組合運動、即ち、いわゆるサンジカリズムの運動を、とりわけ重視していると思われる点である。ロヴァンも述べているとおり、⁵¹⁾ドレイフュス事件以後のフランスにあっては、社会構造における都市化とプロレタリア化とが進行し、また、思想的には、ようやくマルクス主義的イデオロギーの労働者階級への普及と、それによる階級的自覚の高まりもあり、その結果、社会主義的諸党派間の統合が進展し、それらの全体としての勢力の伸長がみられる一方、労働組合運動も、かの「アミアン憲章」⁵²⁾によって象徴される1906年を頂点として著しい発展を示すことになる。そして、こうした事態の推移が、すでに一部の伝統的名望家層の議会共和制、ひいては民主主義からの離反をひきおこすわけであるが、それは同時に、労働者階級の「伝統的名望家層からの解放」⁵³⁾をもたらすものであったことはいうまでもない。ところが、ロヴァンは、この点について、つまり、先ほど指摘した、この時期における新名望家層の形成の問題について、社会主義政党の場合には「当時、社会主義政党ないし社会主義的諸党派は、その内部にかなり多数

の労働者幹部 *cadres ouvriers* を擁していたにもかかわらず、それら諸党派の議会における代表は依然として、その大多数がブルジョアによって占められていた⁵⁴⁾と述べながら、これに対して、労働組合運動については「…しかしながら、ブルジョア的・代表制的・議会主義的民主主義のそれらとは全く別個のさまざまな感情や怨恨、利害や教義によって動かされる新しい名望家 *notabilité*」、新しいタイプのリーダーおよびリーダーシップを表現するもの、これこそサンジカリズムに他ならない⁵⁵⁾」(傍点—原文イタリック)と述べており、したがって、かれは両者のそれぞれの場合を明確に区分し、そのうえで後者、即ち、サンジカリズムにおける新名望家層の形成をとくに重視したといえるのである。

ところで、ロヴェンが、このように新名望家層の形成という観点から、その意義を高く評価したサンジカリズムとは、いうまでもなく革命的サンジカリズムであり、それは歴史的には、ほぼ1910年ごろを境いにして漸次、改良主義化したのであるが、それはともかく、かれのこうした評価の仕方をパリ・コミューンに対する評価と併せ考えるとき、われわれは、それらに共通する何らかの特徴を見いだすことができないだろうか。そこで、これを先ずパリ・コミューンについてみれば、それはロヴェンによれば「……絶望に由来する、もっぱら否定的な暴動と、名望家たちの民主主義——それは人民のための民主主義であっても、けっして人民による民主主義ではない——を慎重に推し進めようとする配慮との中間に位置する、19世紀における唯一の建設的努力である⁵⁶⁾」(傍点—原文イタリック)とされ、また、それが追求した民主主義の理念とは「……完全に直接的ではないが、さまざまなレベルの連合組織を通じて現実に体得されることができ、それゆえ……80年も前のフランスにおける社会・教育・技術の諸状態をもってしては到底、可能ではなかったほどに直接的な民主主義⁵⁷⁾」(傍点—引用者)のそれであった。そして、かれが次にとりあげたサンジカリズム＝革命的サンジカリズムの場合にも、例えば、先に引用したかれの記述にもあるとおり、それは何よりも先ず、伝統的名望家層によって媒介された民主主義、

即ち、ブルジョア的議会共和制に対する拒否を原則としながら、いわばその枠外あるいは周辺部において労働者階級の地域的・職能的、そして何よりも日常的な連帯感に依拠することによって、また、これもパリ・コミューンの場合と同じく連合主義的原理にもとづいて、みずからを組織し、いわゆる直接行動によって、かれらの民主主義を達成しようとするものであった。⁵⁹⁾

さて、このようにして両者、即ち、パリ・コミューンとサンジカリスムとは、いずれも新しい形態の民主主義——それは約言すれば、直接的な民主主義といえるかもしれない——への志向性を共有しながら、それぞれの運動を通じて伝統的名望家支配に対抗する、新しいタイプの指導者たち＝新名望家層を生みだしていったが、われわれは、こうした観点から、さらにロヴァンの記述をみると、それ以後のフランス民主主義の展開過程にも、それらと同様の事例を見いださるのである。即ち、それは先ず、1930年代におけるファシズム勢力の擡頭に対抗する人民戦線運動であり、次に、第三共和制の崩壊から第四共和制の成立に至る時期の、いわゆるレジスタンス運動である。

周知のとおり、フランスでは1935年から翌年にかけて反ファシズム・共和制擁護のための人民戦線運動が昂揚し、36年6月には総選挙(5月実施)によって多数を占めた人民戦線派が、フランス民主主義史上、まさに画期的なブルムの人民戦線内閣を成立せしめたのであるが、⁶⁰⁾その場合、この運動を発足させる直接のきっかけを与えたのが、いうまでもなく34年2月6日の伝統右翼・ファシスト諸団体による大規模なデモと騒擾、即ち、いわゆる「2月6日事件」である。⁶¹⁾ロヴァンは、この事件がそれまで程度の差はあれ、どうにか議会共和制に同意し、その限りにおいて民主主義と両立しえた旧右翼と、当時、急速に擡頭しつつあったファシスト型新右翼との合流を意味するものと規定し、⁶²⁾これに加えて「2月6日の幹部たちは、その大部分がなお伝統的名望家であるか、あるいは、それ以上に名望家の家系に属する人びとである。ところが、かれらは今や、かつて名望家社会が

創設し、そのまま存続した諸制度に対して激しく敵対したのである⁶³⁾」と述べているが、ここでかれのいう旧右翼とは、即ち、伝統的名望家層ないしは、その後継者たちを指しており、かれらの民主主義＝議会共和制からの離反は、先にもふれたとおり、すでにドレイフュス事件の頃から始まっていた現象である。そして、この反民主主義、議会共和制否定の傾向が第一次大戦を経て、30年代における体制的危機の深まりのなかで一挙に顕在化したのが「2月6日事件」であったといえよう。

したがって、共和制擁護の旗印を掲げ、伝統的名望家支配の、いわば政治的表現にすぎない議会共和制の枠組を一步も越えようとしなかった人民戦線運動は、この議会共和制を放棄した伝統的旧名望家層に代位して、逆に、これを擁護するという側面をもち、その限りにおいて、それは、フランスにおける民主主義の発展を抑制することによって、これを擁護しようとした運動である、⁶⁴⁾ といって差しつかえない。しかし、この運動の歴史的意義が、それにとどまるものでないことも当然である。この点、ロヴェンは、「たとえ短期間であったにせよ、人民戦線の経験は、1936年の社会がもはや19世紀の名望家社会ではなく、そこには新しい諸領域が、民主主義の諸観念を実現するために開かれていることを、目をみはらせるようなやり方で証明した。人民戦線には、このようにして直接民主主義の諸態様、即ち、みずからの問題をみずからが管理するため、これに大衆が新しく、そして、自覚的に参加する場合のさまざまな態様がみられるのであり、また、これまで名望家たちによる媒介と、かれらによって、かれらのために考えつかれた代議制のシステムとが維持されたことにより、かくも長期間、理論上のものでしかなかった普通選挙制の具体的な実現における新たな一段階⁶⁵⁾が示されている」(傍点—原文括弧内)と述べて、人民戦線運動の積極的意義が先ず、直接民主主義の具体化に一步を進めた点にあることを指摘した後、さらに続けて「そこ(人民戦線)ではまた、大衆社会に登場する新しい仲介者たちintermédiaires、即ち、新しいタイプの名望家たちの力と、その役割の目覚ましい発現がみられる。ここでいう新しいタイプの名望家

・・
たちとは労働運動の幹部たちをいうのであるが、かれらは今や……政治の領域におけるよりも、むしろ企業の内部において、さらに、かれらの社会的パートナーとの大規模な交渉の場において……そのための準備をなし終え、新しい代表的諸機能の発揮を、みずから引受けるに至った人びとである⁶⁶⁾」(括弧内—引用者、傍点—原文二重括弧)と述べており、したがって、人民戦線運動のなかで直接民主主義への新たな展望を切りひらくことができたのは、ここでも、まさに新しいタイプの名望家たち、即ち、労働者的新名望家層に他ならないとされているのである。

次に、レジスタンスであるが、それが運動の現象面において、それに先行するサンジカリズムや人民戦線の場合とは大いに異なることはいうまでもない。しかし、運動の本質に関する理解の仕方、あるいは、それへの評価についてロヴェンの観点は、基本的には前二者の場合と変るところがない。そもそも、この運動は、かれによれば第三共和制、即ち、伝統的な名望家層によって創設された「議会共和制が右翼にとって、もはや自分たちを最も少なく分裂させる体制ではなく、また、左翼にとっても、それがなお新しいタイプ⁶⁷⁾の名望家層が、みずからの代表資格にふさわしい政治的リーダーシップの諸機能を発揮しうる体制になっていない」(傍点—原文二重括弧、下線—原文イタリック)という状況のなかで、いいかえれば「……代議制の諸制度にあって、正当に代表されていると感ずる人びとの数が減少の一途をたどる⁶⁸⁾」過程において——ただし、最終的にはファシズムの暴力によって——崩壊した後、ヴィシー政権、国内ファシズム勢力と並んでフランスを三分する政治勢力のひとつを構成したものであるが、それが先ず、「民主主義の理念を実現するという観点からして、もっとも重要であることは自明である⁷⁰⁾」とするロヴェンの指摘は当然のこととして、次に、それが「……きわめて代表的であり、しかも人間一個人としても、また、かれらが所属する社会的諸階層においても、旧体制(第三共和制)の指導者たちとは無関係の新しいリーダーたち⁷¹⁾を出現せしめた点に、その真の収穫を認める」(傍点および括弧内—引用者)ことができるというかれの評価も、いわば

従前のパターンと同様である。

しかしながら、われわれがここで注目したいのは、この運動における「新しいリーダー」、即ち、名望家機能の担い手が具体的には、どのような人びとであったのか、という問題である。すでに述べたとおり、ドレイフュス事件以後におけるフランス民主主義の発展過程において漸次、民主主義から離反していった伝統的名望家ないしは、その後継者の反民主主義的支配に対抗し、あるいは、これに代位することによって民主主義の擁護と、その発展に貢献した新名望家層とは、じつは労働者的であり、かつ、組織に内在し、これを指導することを通して名望家機能を発揮した人びとであった。ところが、レジスタンスの場合、そこでの名望家機能の担い手は、先ほど引用したロヴェンの指摘にあるとおり、さまざまな社会的諸階層に属し、また、レジスタンス運動の性質上、かれらは、いわば無名の一般市民であるとしかいいようなない人びとである。しかも「この新しい名望家たちの集団 *phalange* は、……きわめて限られた状況が必要とするところに応じて特別に《*ad hoc*》に現われた⁷²⁾」人びとであり、それゆえ、かれらの活動も、あくまで例外的・一時的な現象にすぎなかった。しかし、それにもかかわらず、これもロヴェンが見事に表現しているが、この運動は「……明らかに一個人によって単独でなされる、さまざまな任務の遂行を通して、……民衆 *peuple* を正当かつ真正に代表する幹部たちを民衆自身が出現せしめた、フランス史における自発的な民主主義のもっとも感動的な瞬間のひとつを垣間見せている⁷³⁾」（傍点—引用者）ことに変わりはない。

レジスタンス運動の民主主義的意義の評価は、おそらくこれに尽きると思われるが、それはさておき、先にわれわれが提起した問題、即ち、この運動の過程で形成された新名望家についていえば、これまでに引用したいくつかのロヴェンの記述から推察する限り、先ず、かれの所属する社会階層や集団を超えて原理的には、みずからをそれらに先在する自立的個人として自覚し、何よりも個人の資格と責任において行動する人間であり、したがって、個人の人間的価値を否定する他者に対しては自発的にこれと対

決する能動的な人間である。そして、いわば、こうしたレジスタンス的人間像を、かりにサンジカリズムや人民戦線運動を指導した新名望家のそれと対比させるならば、両者は、その能動性において共通する側面をもちながら、後者が労働者の・組織内在的人間であったのに対して、前者は、先ほど述べた意味において個人的・組織先在的人間であり、あるいは、より適切に市民的人間である、といえるのではなからうか。むしろ、このレジスタンス的人間像により近いイメージを他に求めるとすれば、それはパリ・コミューンの指導者たちであるかもしれない。だが、それよりも、ここで想起する必要があると思われるのは、われわれが本節のはじめに問題を提起した際、現代民主主義がわれわれに要請する人間として、そのイメージをえがいた主体的・能動的な人間のことである。それはビュルドーに即していえば、個人としての重みをもたない「定位された人間」の、環境による一方的な被規定性を克服し、あるいは理論的・抽象的にのみ「設定された人間」に、その実在性を与えるため、積極的に行動しようとする人間であり、すでに、われわれが市民的人間と規定した存在であった。それゆえ、もはや明らかになったとおり、かのレジスタンス的人間像に照応するものは、現代民主主義がわれわれに要請する主体的・能動的人間、即ち、市民的人間のイメージである。これを逆にいえば、この市民的人間像を歴史に具現するもの、これこそ、かつてレジスタンス運動のなかで民衆みずからの手によって形成された無名のリーダーたち、即ち、市民的新名望家集団を構成する人びとに他ならない。

レジスタンス運動にみられる新名望家たちの活動が、例外状況における一時的な現象にすぎなかったことは、すでに指摘したところであるが、それゆえ、たとえ、その活動が民主主義的にどれほど高く評価されるべきものであっても、かれらが「解放」〈la Libération〉後のフランスにおいて社会的・政治的に構造化され、旧名望家層にとって代りうる一箇の政治階級⁷⁴⁾にみずからを形成するまでには至らなかったことも事実である。1944年

のフランスに革命状況が生まれなかった理由のひとつには、こうした事情もあったであろうが、それはともかく、ロヴェンの適切な表現によれば、そこでの「解放」は復古 *une restauration* をもたらしたにすぎない。⁷⁵⁾したがってまた、1946年10月に成立した第四共和制憲法の基本理念が「……伝統的タイプの議会制民主主義（第三共和制時代の議会共和制）を再建し、かつ、これを完成することを目標とする」⁷⁶⁾（括弧内—引用者）にとどまったのも当然の結果であるといえるかもしれない。とりわけ、これはロヴェンも指摘したことであるが、新憲法において「技術の進歩が直接民主主義のために、これまで考えられなかった諸形態を実現する可能性を切り開いているにもかかわらず、また、それが、かつての連合主義や分権化といった諸観念に新たな現実性 *l'actualité* を付与しているにもかかわらず、それらに関する条項は皆無である」⁷⁷⁾（傍点—引用者）とするならば、これまで第三共和制下の新名望家たちが、かれらの活動を通して少なくとも客観的には、その制度化に尽力したはずの直接民主主義や、あるいは連合主義といった新しい民主主義の諸形態は、この憲法によっても何ひとつ具体化されることがなかった、といわざるをえない。

しかし、問題は、もちろんそれにとどまらない。そもそも第四共和制憲法が、その復活に固執した議会共和制なるものは、いうまでもなく権力の個人主義的あるいは自由主義的観念を基礎とするものであり、それゆえ、それは国家を社会から分離し、その活動領域を可能な限り局限しようとする体制であった。そして、それが19世紀の伝統的名望家社会にのみ適合するものであることは、すでに述べたところからも明らかであろう。しかも、この憲法が適用されようとしている第四共和制下のフランス社会にあっては、従前にもまして、ロヴェンが指摘したところの「……政治化された領域の拡大、新しく政治化された諸部門の管理にともなう新たな職務 *responsabilités* の創設、名望家的・リーダー的諸機能の増加……という、三つの動きがいっそう加速される」⁷⁸⁾（傍点—原文二重括弧）のが不可避であるとするれば、事態は一体、どうなるであろうか。いうまでもなく、それは政治と

現実との乖離であり、⁷⁹⁾また、現実からの政治の逃避である。一般に議会制民主主義にあっては、こうした事態を予防し、あるいは、これを是正するものとして政党による媒介機能が予定されているわけであるが、第四共和制の場合、それが最後まで発揮されることなく、ひいては体制の内部からの崩壊を招くに至ったものというべきであろう。その経過については、例えばデュヴェルジェが、その『人民不在の民主主義』⁸⁰⁾における、かれの中道政治批判のなかで詳細に分析したところであり、もはや繰返す必要はあるまい。ただ、ここで注目したいのは以下に引用するロヴェンの指摘である。それは、かれが「無力にして有害な諸制度」<Institutions impuissantes, institutions nuisibles>と題して、第四共和制の諸制度が現実から遊離したところで運用されることによって無力化し、その結果、有権者のあいだに民主主義一般に対する幻滅、政治そのものへの無関心 l'a-politisme といった害悪をもたらすという、きわめて興味ある問題を論じた際、その冒頭の一節において「形式的議会政治 le formalisme parlementaire に政党指導層 les états-majors des partis の無責任な独裁が接ぎ木される。この独裁は奇妙なことに、かつての名望家たちによっても、あるいは党内の官僚制によってその権限と責任とを剝奪された党活動家たちによっても、もはや媒介されることのないばらばらの砂粒のような有権者への党の従属関係を、これまた無責任な暗闇のなかで活動する圧力団体への党の従属関係と共に強化する。議会制度の復活をもってしても、解決を迫られているさまざまな問題に対して諸制度が適合していないのではないかという感情が、大衆 le grand public のあいだに拡がるのを防止することができない」⁸¹⁾（傍点—引用者）と述べ、第四共和制における名望家の問題にふれているからである。

即ち、ここでロヴェンが指摘していることは、われわれの文脈に即していえば、議会共和制を復活させた第四共和制にあって、かつての名望家＝伝統的名望家はいうに及ばず、党活動家——それが、われわれのいわゆる労働者的・組織内在的新名望家を意味するものであることは、引用文中の

かれの用語からしても明らかである——でさえも、かれらは、すべて名望家としての本来の媒介機能を発揮することがなく、結局、それが政党をして、その主体性を放棄せしめる要因となり、しかも、こうした名望家機能の喪失という事態が、じつは組織内部における官僚制と独裁一寡頭制に由来するという問題である。ところで、ここで指摘されているのは政党、それも中道・左翼の、いわゆる大衆組織政党の場合であるが、いうまでもなく、これと同様の事態が、この時期、次第に大規模化していった労働組合——それは第四共和制下において巨大な職能団体として、もはや無視することのできない体制の構成要素となっている——にもみられるのであり、それゆえ、われわれは、こうした観点から、とりあえず次の点を指摘しておきたい。それは、第三、第四共和制を通じて、ただしパリ・コミューン、レジスタンスといったごく例外的・一時的な場合を除けば、一般に新名望家層、ここでは労働者的・組織内在的名望家層が、つねに既存の政治的・社会的諸制度・機構の枠内においてのみ民主主義の問題を考えたところに、かれらの限界といったものがあつたのではないか、より具体的には、伝統的な議会共和制と、その枠内における政党政治、さらに、その政党に系列化された労働組合といった諸制度・機構の内部に組みこまれることによって、かれら自身も伝統化し、本来の名望家機能を減退・麻痺させていったのではないか、という問題である。また、これを逆の側面からとりあげるならば、それはすでに指摘したとおり、こうした諸制度・機構の枠外もしくは、それらの周辺部において、いわば一般大衆と共にあり、かれらのなかで活動する新名望家たち、即ち、われわれが先に概念化したところの、個人的・組織先在的新名望家集団こそ、民主主義に不断の活力を与える原動力となりうるのではないか、という問題として提起されることになるが、これについては、できれば後でもう一度とりあげてみたい。

さて、第四共和制は、はじめに指摘した体制の基本矛盾、即ち、そこでの政治と現実との乖離の問題に、最後まで有効な対応策を見いだせないまま、直接には、アルジェリア問題の解決に失敗することによって崩壊し

たが、その後、フランスには周知のとおり、議会制 *le régime parlementaire* ないしは議会中心体制 *le régime d'Assemblée* とは全く対蹠的な政治体制、即ち、大統領制 *le régime présidentiel* をとる1958年憲法＝第五共和制憲法が採択され、しかも、それがドゴール大統領によって運用されることにより、極端なまでの大統領中心体制、いわゆるゴーリスム *le gaullisme* ——ビュルドーの「人民投票的民主主義」がそれである——なるものが出現する。⁸²⁾したがって、そこでは名望家の問題も従来のそれとは異なる状況の下で提起されることにならざるをえず、われわれとしても、さしあたって、こうした新しい問題状況を明確に把握する必要がある。そして、そのために、あらかじめ確認しておきたいことは、第四共和制が本来なら、そこでの政治と現実とのずれ、ないしは現実からの政治のおくれを是正すべき名望家機能の担い手を欠いたまま崩壊したものである以上、これを引き継いで成立した第五共和制にとっても、名望家機能の空白状態を何らかの方法によって解決することが客観的には要請されていたという事実である。それでは、第五共和制において、そこでのゴーリスム支配は、こうした客観的要請にどのように対処したのであろうか。この点について先ず考えられるのは、いうまでもなく、この空白を埋めるべき名望家機能の新たな担い手＝新名望家層の形成であるが、ロヴァンの指摘にあるとおり「……民主主義の支配者たち *maîtres* には、新名望家を……意識的・系統的に出現させようとする配慮が欠けており……」⁸³⁾（傍点—原文二重括弧）、また「政治一般、とりわけ民主主義に対するフランス人の不信が、……複雑なコンプレックスのなかで瀰漫する」⁸⁴⁾といった当時の状況にあって、これを期待することは到底、無理であったといわざるをえない。それゆえ、ゴーリスムにとって、これとは別の方法によって名望家機能の空白を埋める必要があったが、この点、少なくとも結果的には、次にあげる二つの方法ないしは現象が、この空白を埋める機能を、いわば擬似的にのみ発揮したのではないか。即ち、それは先ず、本稿の冒頭にも指摘したところの、いわゆる権力の個人体现化現象のこの時期における異常な昂進⁸⁵⁾

であり、次に、テクノロジーの発達にともなう現代社会・国家における一般的傾向としてのテクノクラート——ロヴァンは、これを比喩的に技術者的名望家 *notables techniciens* ともよんでいる——の社会的・政治的影響力の増大、いわゆるテクノクラシー化の進行という現象である。約言すれば、前者は、権力による上からの一方的な統合機能を極大化し、逆にいえば個人の、市民としての主体性を日常生活に埋没させることによって、結果的には、個人を権力のまえに極小化するものであり、後者についても、それは、ロヴァンの表現によれば「……大多数の人びと *les grandes masses* に対する技術者的名望家の支配、即ち、指揮命令と技術的指導の能力によって選ばれたエリートによる、程度の差はあれ、ある種の開明専制政治⁸⁶⁾」の到来を意味するものといえよう。それゆえ、両者は共に、われわれの基本的な問題意識——それは、現代民主主義の創造的担い手としての、主体的・能動的市民の創出であり、また、そのための触媒となるべき先駆的・活動的市民層—新名望家層の形成であった——とは原理的に相容れるものではなく、したがって、そうした名望家機能の反民主主義的な擬似的代替現象にすぎないものをそのまま肯定することはできない。結局、第五共和制におけるフランス民主主義の課題は、ここでもまた名望家機能の空白を埋めるべき新名望家層の形成にある、といわなければならない。

ところで、ロヴァンは、『前掲書』の後半、その「建設」篇において、われわれの立論とはややニュアンスを異にするとはいえ、結論的には、これとはほぼ同様の観点から第五共和制の民主主義的課題をとりあげ、そこから、かれのいわゆる「教育国家」<l'Etat éducatif⁸⁷⁾>なる概念を提示して、その具体的な構想を述べているが、すでに指摘したとおり、そこでも名望家概念が重要な意味を与えられ、興味ある名望家論が展開されているのである。本来なら、ここで先ず、それをとりあげて検討した後、現代民主主義における名望家の問題を考えるべきところであるが、もはや、その余裕がない。そこで、以下のところでは、この問題に関するロヴァンの所説を適宜、参照しながら、これまでのわれわれの考察から抽出される問題

点のいくつかを、ごく簡単に整理し、指摘するにとどめたい。

現代民主主義との関連において名望家の問題を考える場合、先ず指摘する必要があると思われるのは、そこでの議会制あるいは、より一般的に代表制民主主義の諸制度に対して新名望家をどのように位置づけ、また、その役割をどのように理解すればよいのか、という問題である。すでに述べたとおり、わずかな例外的事例を除けば、従来の第三、第四共和制を通じて、フランスの新名望家層は、多かれ少なかれ、いずれも議会制民主主義が設定した政治的・社会的な諸制度・機構を原則的には肯定し、それらの枠内における活動を通して、その名望家機能を発揮したが、一面においてかれらは、そうした活動方式によったからこそ制度・機構の枠組の内外に対して、かなりの影響力を及ぼしえたのかもしれない。しかし、逆の面でそれが、かれらの活動にとって桎梏となり、それによって、かれらの名望家機能を硬直化せしめ、やがて、かれら自身の⁸⁸⁾伝統化をもたらしたとわがざるをえない。したがって、今後の新名望家・民主主義者たちにとって、既存の議会制（代表制）民主主義が設定した制度・枠組の外部ないしは、その周辺部における活動を重要視すること、いいかえれば、⁸⁹⁾民主主義の直接的な諸形態の実現を志向することが必要であり、また、そのためにも、新名望家層の活動は、政治・社会の各分野にわたって日常的・継続的でなければならず、活動内容も多様性に富み、流動的であることが必要とされるだろう。なお、これに関連して一言、付け加えるならば、こうした名望家機能の創造的発揮のために必要な条件として、政治の観念それ自体にも何らかの発想の転換が要求されるのではないか、という問題がある。ロヴェンは、これを一般政治 *la politique générale* の伝統的枠組を越える必要性と表現したが、ここでは、そうした問題の所在を指摘するにとどめざるをえない。⁸⁸⁾

さて、次に現代民主主義における名望家の問題を考える場合、欠かすことのできない問題は、そこでの新名望家層とテクノクラートないしはテクノクラシーとの関係をどのように考えるのか、という問題である。ロヴェ

ンによれば、いわゆる専門技術者 *«techniciens»* が伝統的名望家から機能的に分化し、新たに政治化された経済・社会の諸領域において政治的影響力を発揮し始めたのは第一次大戦後から世界恐慌に至る時期であるが、その背景をなすものは、いうまでもなく国家の社会的・経済的機能の拡大であり、また、いわゆる職能的利益団体 *les groupes d'intérêts* の圧力団体化といった現象であるが、さらに、先ほども指摘したテクノロジーの発達、それらの根底にあったことも忘れてはならない。それはさておき一方における専門技術者の擡頭、他方における国家行政機能の拡大とともに行政官僚の政治的発言権の増大と相俟って、いわゆるテクノクラート層が形成され、その結果、テクノクラシーがゴースムと共に体制の支柱となったのが第五共和制であったといえよう。それらが、同体制下における名望家機能の担い手の空白を埋める擬似的機能を発揮した点については、すでに指摘したところであるが、そこでのゴースムは、ドゴール在任中の、いわば一時的現象であり、ドゴール⁸⁸⁾以後の政治状況からみれば、例えば、メイノーが、その『テクノクラシー——神話か、現実か?——』⁸⁹⁾において考察しているとおり、テクノクラートによる権力意志の上からの媒介が、今後の第五共和制にあっては重要な政治的要因として考えられなければならない。したがって、こうした政治状況のなかでは、テクノクラシーに対する下からの対抗勢力として、そこでの新名望家層、とりわけ、われわれのいう個人的・組織先在的新名望家集団の形成が、現代フランスにおける民主主義的課題として大きくクローズ・アップされるのである。この問題、即ち、テクノクラシーに対抗する新名望家集団の形成は、より原理的には、ロヴェンのいわゆる専門性 *la technicité* に対する非専門性 *la non-technicité* の矛盾した関係として提起されるわけであるが、これについては、問題の所在をより明確にするため、ロヴェンの記述を次に引用するにとどめて、先へ進むことにする。「明日の民主主義の中心問題は、非専門的市民が専門技術者を任命し、統制すると共に、一般的な方針の選択⁹⁰⁾に参加することが可能であるか、どうかという点にある……」。

最後に、第三の問題点として指摘しておきたいことは、現代民主主義にのみ関わる問題というより、むしろ、民主主義の本質に関わる根本問題であると思われるが、その重要性は、現代民主主義における名望家の問題を取りあげる場合に、とりわけ顕著であるといえるかもしれない。即ち、その問題というのは、例えば、普通選挙制によって端的に表明されており、民主主義にとって、おそらく最も根本的な価値は平等であるが、それにもかかわらず、現実には、人間のあいだに才能、適性などの面でどうにもならない不平等が存在するという矛盾であり、また、これをどう解決すればよいのか、あるいは、解決できないならば、これにどう耐えるのか、という困難な問題である。⁹¹⁾民主主義が普通選挙制に基礎をおきながら、なおかつ、少数の名望家を必要とするのは、こうした矛盾が、その根底にあるからであろう。あるいは、そう考えるよりも、民主主義は、それが民主主義であるがためには、少しでも多数の名望家を必要とする、といった方がより生産的であるかもしれない。それはともかく、われわれは、ルソーの批判があるにもかかわらず、⁹²⁾それを承知のうえで、まさに普通選挙によって少数者を選出するという、明らかな矛盾を犯しているわけである。ロヴァンは、おそらく、そうした問題性を考慮したうえで、なお「……それ（民主主義）は、共同の諸問題、とりわけ政治によせる、より強い関心によって、また、活動分野の如何にかかわらず、そこでの指導と激励の仕事に従事することによって一般の人びとから区別される少数者を必要とする」⁹³⁾（括弧内—引用者）と述べ、民主主義における指導的・活動的少数者、即ち、名望家層の存在価値を認めているのである。しかも、普通選挙制が確立し、一般的な生活水準の向上、教育・文化の普及と発展、とりわけ情報手段の飛躍的な発達などによって、いわゆる大衆民主主義的状况が現出した結果、そこでの名望家層による民主主義的名望家機能への期待は、いっそう大であるといわなければならない。しかし、それにもかかわらず、社会と国家における少数者支配の法則は貫徹するのであり、⁹⁴⁾民主主義を志向する名望家集団といえども、この法則から免れることはできない。それゆ

え、次の課題は、どのようにして指導的・活動的少数者の「無責任な閉鎖的特権集団への凝固を防止する⁹⁵⁾」のか、という問題になるわけであるが、それはまた、別に考察すべきものであろう。

以上で本節における「名望家」の問題の考察を終えることになるが、対象の複雑さを整理し切れず、加えて、問題提起と名望家概念の規定に手間取り、また、多くの紙数を費したため、本論の考察がまことに不十分なままで締め括らざるをえなかった。最後に、ロヴェンの民主主義論における結語の一節を引用して結びにかえたい。なぜなら、それは本節において、われわれが「名望家」の問題を考えると、その考察を根底から方向づけた民主主義観に合致すると思われるからである。「民主主義とは、他者と共に生存するひとつの生き方であり、個人的であると同時に社会的でもある生活のひとつの型である。それは、ひとつのイデオロギーでもなければ教義でもなく、また、体系でもない。わたくしは心底から、こう言いたい。即ち、民主主義というものは存在しない。存在するものは、ただ、民主主義について皆が同じことを考えることがありえず、また、民主主義から同じものを期待することもありえない、そういった民主主義者たちだけなのである⁹⁶⁾」。

〔註〕

- 1) G. Burdeau, *La Démocratie*, Chapitre IV, <De la démocratie politique à la démocratie sociale>.
- 2) 拙稿「現代民主主義に関する一考察」(名古屋大学『法政論集』第54号所収)、第3節、(2)を参照のこと。
- 3) 4) G. Burdeau, *op. cit.*, p. 63
- 5) *ibid.*, Chapitre V, <La socialisation de la démocratie et les transformations des conditions de la vie politique>.
- 6) *ibid.*, p. 86

なお、ビュルドーによれば、そうした現象は、「政府がその行動を直接、規律するためではなく、それを条件づけるところの、さまざまな要因に作用を及ぼすために行われる」(ibid., p. 86) ところから生ずるものとされる。

7) 8) ibid., p. 88

9) 10) ibid., p. 90

以下、本文中に傍点を付して原語を示した箇所は、いずれも同ページ中におけるビュルドーの記述から引用したものである。

11) ibid., p. 90

12) ibid., p. 91

なお、本文中、この引用中のすぐ前のところで、傍点を付して示した「個人としての重み」をもたない存在としての人間について、ビュルドーは、こう説明している。即ち、「かれの意志や願望は、かれがその構成員となり、結局、それに匿名の顔だけを与える集団の存在を介してのみ、はじめて現実に適えられる」(ibid., p. 91)。したがって、より具体的には、かれは、集団を代表する指導者＝仲介者を通して、間接的に政治化されるにすぎない。

13) ibid., p. 93

14) ibid., p. 94

15) ibid., pp. 93～94

16) ibid., p. 94

17) ビュルドーが「諸政党の変容」として指摘しているのは、ごく簡単にいえば、第一に、世論政党からイデオロギー政党への変容であり、第二に、市民政党から大衆政党への変容である。その詳細については、cf. ibid., pp. 94～101

18) 19) ibid., p. 94

20) l' <homme produit>, cf. ibid., pp. 24～26, p. 29

21) それは、ルソーの根本理念としての「自然人」を社会状態＝国家における「市民」に、いかにして連続させるのか、あるいは、その理念としての「自然人」が、「市民」の中核にいわば良心のように存在することができるような、そうした理想国は、どのようにして実現し、また、どのような機構をもつべきであるか、といった問題として提起されるが、ルソーは、この問題を一回の、そして、全員一致による「社会契約」によって解決しようとしたわけである。ところが、それが「自然人」と「市民」とを接続させるための論理的要請であることには変りがないわけであるから、われわれとしては、やはり「……各人が、すべての人びとと結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、以前と同じように自由である……」(岩波文庫版、桑原・前川共訳、ルソー『社会契約論』、29ページ) ような国家を、現実の国家を前提とし、そのなかから実現せざるをえないのであり、そのための具体的方策を考えなければならない。こうした観点から、ルソーの「

社会契約」が意味するものを考えるとき、根本的には、問題解決への手がかりが、国家を構成する個人の「主権への参加」（『同書』，31ページ）によって与えられるといわざるをえない。つまり、本文で指摘した市民的人間の形成は、積極的な政治参加のなかでのみ可能である，ということではなかろうか。したがって、この問題に関する次の指摘は、まことに当をえたものといえよう。即ち、「ルソーの人間は、ロックの場合のように個人としては自律できないでしょう。しかし、ルソーはそういう弱い人間，利己心のかたまりのような人間も，社会の主人として政治に参加することによって，理性にまで高められる。本当に人間にふさわしい尊厳を自分のものにすることができる，と期待して，人間はそのときはじめて本当に自由になる，と考えたのであります」（傍点—引用者，岩波新書版，福田歓一『近代の政治思想』，158ページより。なお，この引用文中ではなく，本註のはじめに傍点を付した箇所は，平岡昇「ルソーの思想と作品」，中央公論社刊，『世界の名著』，第30巻所収，49ページより引用したものである）。

- 22) ここで名望家概念を規定するに際しては，一応，マックス・ウェーバーの概念規定に拠った。次の各箇所を参照されたい。

ウェーバー『経済と社会』，第2部，第9章，1節（創文社刊，世良晃志郎訳『支配の社会学』，I，19ページ，24—25ページ）。

ウェーバー『職業としての政治』（河出書房刊，『世界の大思想』，第23巻所収，清水幾太郎・清水禮子訳，393—394ページ，406—409ページ）。

- 23) cf. A. Jardin, A.-J. Tudesq, *La France des Notables, L' évolution générale, 1815~1848.* (Nouvelle histoire de la France contemporaine - 6), 1973. p. 157

なお，この指導的カテゴリーの支配能力の基礎について，また，本文後述のとおり，大名望家支配の時期が歴史上の過渡期に相当する点については，

cf., *ibid.*, pp. 154~157, pp. 219~223

- 24) A.-J. Tudesq, *Les grands notables en France (1840~1849), Etude historique d' une psychologie sociale*, 2 vols. 1964.

本書におけるテュデスクの名望家概念が，基本的には歴史学的範疇，かれの用語によれば「年代学的枠組」〈*le cadre chronologique*〉に属するものであることについては，本書，第1巻，序論の8ページ，12ページを参照のこと。

なお一言，ここで指摘しておきたいことは，テュデスクが本書で考察の対象とした指導的カテゴリーとしての大名望家層と，ロムが，その『権力の座における大ブルジョアジー（1830—1880年）』（J. Lhomme, *La Grande bourgeoisie au pouvoir, 1830~1880.* 1960. 木崎喜代治訳，『権力の座についた大ブルジョアジー』，岩波書店，昭和46年刊）においてとりあげている，指導的階級 *la classe dirigeante* としての大ブルジョアジーとの関係である。この点，両者は，服部春

彦氏の指摘によれば（服部「フランス復古王政，七月王政」，岩波講座『世界歴史』，第19巻所収），それぞれの社会集団内部における旧貴族・大地主層の位置づけについて，相互に見解の相異がある（『同巻』，服部論文，32—36ページ参照）とされるが，かりにそうであっても，また，それによって，七月王政期あるいは，それ以後における政治的・経済的な過程の理解に何らかの食い違いが生ずるとしても，少なくとも巨視的には，つまり，両者が共に，七月王政期から1880年代に至る時期，フランスを政治的・経済的に支配し，ないしは，これを指導した社会集団を意味する概念である，という点において，両者は相蔽うものであると考えてよい。

- 25) P. Grémion, *Le Pouvoir périphérique, Bureaucrates et notables dans le système politique français*, 1976.

本書において，著者が名望家概念の社会学的・機能論的理解の重要性を指摘した箇所としては，例えば，第2部，第6章，6節の167—168ページを参照されたい。

- 26) cf. *ibid.*, 2^e Partie, Chapitre VII, pp. 154—170.

- 27) *ibid.*, p. 212

なお，これに関連して，次の指摘も参考になる。即ち，「……要するに，地方官僚にとって名望家の効用は，中央行政に対して，みずからの自立性を確保するための保証を，名望家が与えてくれるところにある。地方官僚は住民と直接に接触することがなく，名望家という導管を通さなければならない。市民も，これに対応して，名望家の手をかりなければ，官僚制のさまざまな段階にめったに接近することができない」。（*ibid.*, p. 253）

- 28) *ibid.*, p. 260

- 29) cf. *ibid.*, p. 260

- 30) *ibid.*, p. 308

- 31) 1872年9月26日，ガンベッタはグルノーブルにおいて演説し，都市や農村の働く人びとに向って，共和制を樹立するために政治への積極的な参加を呼びかけたが，「新しい社会階層」とは，この演説のなかで，これらの人びとを指す用語として，かれが用いたものである，この演説の政治的意味，とくに「新しい社会階層」の具体的内容などについては，次の箇所を参照されたい。

cf. J.-T. Nordmann, *Histoire des radicaux, 1820—1973*. 1974. pp. 63—67

D. Thomson, *Democracy in France*, third edition. 1958. pp. 40—42

A.-J. Tudesq, *La Démocratie en France depuis 1815*. 1971. pp. 115—118

（評論社刊，拙訳『フランスの民主主義——1815年以後——』，135—138ページ）

32) 急進派の政治的進出は、1871年2月の国民議会議員選挙における極左派議員42名の当選となって現われたが、それが決定的になるのは、やはり、1877年の同選挙における共和派の圧勝であり、とくに、クレマンソーとその極左急進派の擡頭である。

なお、この時期以後、80年代にかけての急進派の内部対立、いわゆる日和見派に対する非妥協派の攻撃については、次の箇所を参照されたい。

J.-T. Nordmann, *op. cit.*, pp. 72~90

Cl. Nicolet, *Le Radicalisme. (Que sais-je?)* pp. 27~32 (白水社刊, 文庫クセジュ版, 白井・千葉共訳『フランスの急進主義』, 36—43ページ)。

A.-J. Tudesq, *op. cit.*, pp. 118~120 (邦訳, 前掲書, 138—140ページ)。

33) 34) P. Grémion, *op. cit.*, p. 261

35) *ibid.*, pp. 257~258

なお、これに関連して、本文中に述べた、現体制下における名望家の政治的立場、とくに、その保守性については、

cf. ibid., pp. 258~259

36) J. Rovin. *Une Idée neuve : la démocratie*, 1961.

37) *cf. ibid.*, p. 22

38) *ibid.*, p. 22

39) *ibid.*, pp. 24~25

40) *ibid.*, p. 131

41) *cf. ibid.*, p. 128

42) *ibid.*, p. 128

43) *cf. ibid.*, pp. 28~29

44) *ibid.*, pp. 26~27

45) 例えば、ロヴァンは、外的な悪条件が除去されれば、自動的に民主主義社会・国家が到来するという安易な民主主義——かれのいう自動的民主主義 *démocratie automatique* —— 観に対する批判のなかで、次のように述べている。「とにかく、民主主義を一段と高い段階に *à un palier de réalisation supérieur* 引きあげたいと願う社会のすべてに、ますます共通して必要になってくることは、行動主義的 *«activistes»*・活動的であり、かつ、媒介者的な少数者の系統的な発展の問題を研究し、これを促進すると共に、かれらを指導し、条件づけようとする意志である」。(*ibid.*, p. 142)

46) *cf. ibid.*, p. 26

47) *ibid.*, p. 29

48) *ibid.*, p. 30

49) *cf. ibid.*, p. 30

50) *ibid.*, p. 30

51) *cf. ibid.*, p. 32, p. 34

52) la «Charte d' Amiens»とは、この年の10月、アミアンにおいて開催された、フランス労働総同盟CGT大会において採択された決議で、CGTの基本方針を確立したものとされる。また、それは革命的サンジカリズムの理論を定式化したものとしても、歴史的に重要な文書となっている。その全文は、例えば次の箇所に収録されており、邦訳もある。

J. Bron, *Histoire du Mouvement ouvrier français*, tome 2. Annex 1.

吉田啓一『近代フランス社会運動史』（慶応出版社、昭和23年）、185—186ページ。

なお、本憲章の内容と、その意味について、次の箇所が参考になる。

A. Barjonet, *La C. G. T.*, 1968. pp. 14~19

J. Montreuil, *Histoire du mouvement ouvrier en France, des origines à nos jours*, 1947. pp. 183~194

53) J. Rovin, *op. cit.*, p. 32

54) 55) *ibid.*, p. 32

56) *cf. E. Dolléans, Histoire du mouvement ouvrier*, tome 2. pp. 151~205

J. Bron *op. cit.*, pp. 111~137

なお、喜安朗『革命的サンジカリズム、パリ・コミューン以後の行動的少数派』（河出書房新社、昭和47年）は、行動的少数派の運動としての革命的サンジカリズムが、なぜ改良主義化せざるをえなかったか、の問題を内在的に明らかにするものであり、この問題を考える場合に、貴重な示唆を与えているといえよう。

57) J. Rovin, *op. cit.*, p. 27

58) *ibid.*, p. 28

59) *cf. ibid.*, pp. 32~33

革命的サンジカリズムの運動を支える、その思想性ないしは行動様式について、それを見事に解明したものとして、次の論文があることを指摘しておきたい。

五十嵐豊作「大衆運動と『革命の神話』」（1957年度、日本政治学会年報、日本政治学会編『国家体制と階級意識』所収）

60) 1936年5月3日の第2回投票によって確定した選挙の結果、国民議会において人民戦線派に所属する議員は376名を数え、これに対する中道右派、右翼系議員は238名にすぎなかった。そして、これらの人民戦線派議員は、議会内にあって次の5つのグループ（右端の数字は議席数）を構成した。

急進社会派 le groupe radical-socialiste 106

独立左派 le groupe de la gauche indépendante 26

社会共和同盟 le groupe de l' Union socialiste républicaine 25

社会党 le groupe socialiste SFIO 147

共産党 le groupe communiste 72

(J. D. de Bayac, Histoire du Front Populaire, 1972. p. 195)

なお、この選挙の、より詳細な結果については、

cf. *ibid.*, p. 194

この選挙結果にもとづき、同年6月4日、社会党レオン・ブルムの人民戦線内閣が成立したが、それについては、

cf. *ibid.*, pp. 221~249

61) 本事件については、さしあたって次の箇所を参照されたい。

cf. *ibid.*, pp. 84~107

62) cf. J. Rovin, *op. cit.*, p. 60

63) *ibid.*, p. 60

なお、この時期における伝統的名望家層の民主主義（議会共和制）からの離反については、cf. *ibid.*, p. 62

64) cf. *ibid.*, p. 63

65) *ibid.*, pp. 63~64

66) *ibid.*, p. 64

67) *ibid.*, p. 66

68) *ibid.*, pp. 66~67

69) cf. *ibid.*, p. 68

70) *ibid.*, p. 68

71) *ibid.*, pp. 68~69

72) 73) *ibid.*, p. 69

74) cf. *ibid.*, pp. 71~72

75) cf. *ibid.*, pp. 70~72

ロヴェンは、第四共和制の復古的性格を、かつての復古王政（1814—30年）と比較し、両者の類似性を次のように指摘する。即ち、「革新的な精神をもつレジスタンス派にとっては、あまりにも面くらうようなこの現象（第四共和制の復古的現象）には、じつは復古の時代がもつ意味について、よく考えてみなければならぬ材料が示されている。第四共和制は、1814年から30年にかけてのブルボン王朝と同じく、大変動にともなう疲労と、立停って一息いれ、回復するための生理的・心理的必要とから生れたものである……。復古の期間中に、人びとは、かれらの変革を消化するわけである。……こうして復古王政という休息期が……七月王政を準備したのであり、いずれにせよ、この復古というものは、社会体 *corps social* の新しい前方への飛躍と、それをひきおこすところの、さまざまな現実先に先立つ一旦停止に他ならないのである」。(*ibid.*, pp. 73~74)。かれが、こ

ここで言わんとすることは、おそらく、休息期としての第四共和制を引き継いで成立した第五共和制を、民主主義の新たな飛躍期として位置づけることの妥当性であろう。

76) 77) *ibid.*, p. 72

78) *ibid.*, p. 77

79) ロヴァンは、この点について、次のように述べている。「フランスがみずから与えたばかりの諸制度は、……民主主義の理念の名の下に、ただし、名望家社会の精神的・社会学的地平の枠内において、左翼の反対派が過去100年ものあいだ、代表的・議会制的システムに向けてきた諸要求を、その最も極端な結論にまで押し進めたものであるが、それにもかかわらず、これらの諸制度には、歴史における、この一世紀間に社会それ自体が、また、その名望家的構造が、さらには、そこでの政治の観念や、その適用領域が……現に蒙ってきた、さまざまな変化が全く表現されていないのである」(傍点—引用者)。(ibid., p. 73)

80) M. Duverger, *La Démocratie sans le peuple*, 1967.

(西川・天羽共訳『ヨーロッパの政治構造』, 合同出版, 1974年刊)

81) J. Rovin, *op. cit.*, pp. 85~86

82) ゴーリスムに関する文献は多いが、ここでは、出版後、高く評価され、邦訳もあるシャルロのものと、同じく、かれによる資料集をあげておきたい。

J. Charlot, *Le Phénomène gaulliste*, 1971.

(野地孝一訳『保守支配の構造』, みすず書房, 1976年刊)

dit., *Le Gaullisme*, 1971. (Dossiers, U²)

83) 84) J. Rovin, *op. cit.*, p. 101

85) この現象は、ロヴァンの文脈でいえば、一般に普通選挙制を前提としながら、何らかの理由により、そこでの名望家機能が正常に発揮されない場合、いわば一種の病理現象として発現するものであるが、とりわけテレビジョンをはじめとするマス・メディアの発達した現代国家において、その重要性があらためて認識された現象であるといえよう。フランスにあっては、1960年代の前半、ゴーリスムの最盛期には、この問題がさかんに論議され、ロヴァンも、かれの民主主義論において、それにかなりのページ数を割いている。

cf. ibid., pp. 89~96

なお、これとは別に、本稿、第4節の註(33)も参照されたい。

86) *ibid.*, p. 151

87) この概念を明確に定義づけることは容易でないが、一応、これを国家における多元的な諸制度の運営に、可限な限り多数の人びとが参加することによって、結果的には、国家が市民教育の担い手であるような、そういった国家であると考えてよい。

なお、ロヴェンは、教育国家 l'Etat éducatif を教育者国家 l'Etat éducateur から峻別する必要を説き、教育国家が、けっして何らかの主張を国民に押しつけようとするものではなく、「批判，参加，選択といった，さまざまな反響 des réflexes を引きだし，強化するべきものである」(ibid., p. 111)と述べ，その語感からする権威主義的ニュアンスを極力，否定しようとしている。

88) cf. ibid., pp. 17~19, p. 117

89) J. Meynaud, La Technocratie, mythe ou réalité? 1964.

(ダイヤモンド社刊，清水幾太郎責任編集『現代思想』，第5巻，壽里茂訳『テクノクラシー』，昭和48年刊)

後述との関連でいえば，第五共和制におけるテクノクラート権力の増大は，メイノーの指摘によれば，例えば，次の諸点にみられる。先ず，議員経歴のない官僚に，さまざまな閣僚ポストが与えられていること，次に，立法議会の地位の低下にともない，行政官僚が議会の統制から免れることができるようになっていること，さらに，政党を政府の活動回路から遠ざけようとする大統領の意思が強固であること，などであるが，この最後の点については，ドゴール以後の段階では事情が異なっているといわなければならない。ただし，逆に，その段階では，大統領の強大な権力による統治が，技術者の権力の減退をもたらすという，ヴェデルやメイノーの主張が，その根拠を失なうことになる。こうした問題については，

cf. J. Meynaud, op. cit., pp. 133~135

しかし，より本質的に，フランスにおけるテクノクラートの権力増大の諸要因を論じた，本書，第6章の叙述が重要である。

90) J. Rovin, op. cit., p. 115

91) cf. ibid., p. 144

92) 周知のとおり，ルソーによれば，一般意志は，けっして代表されるものではなく，したがって，選挙によって選出された議員といえども，人民の一般意志の代表者ではありえない。そこから，かれの有名なイギリスの議会政治に対する批判がなされるが，かれはまた，同じ章で，こう述べている。「……人民は代表者をもつやいなや，もはや自由ではなくなる。もはや人民は存在しなくなる」。(岩波文庫版，桑原・前川訳『社会契約論』，136ページ)

93) J. Rovin, op. cit., p. 129

94) ここでもルソーを想起するならば，かれは『社会契約論』において「民主政という言葉の意味を厳密に解釈するならば，真の民主政はこれまで存在しなかったし，これからも決して存在しないだろう。多数者が統治して少数者が統治されるということは自然の秩序に反する」(桑原・前川訳『前掲書』，96ページ)と述べて，この法則の普遍性・恒久性を基礎づけている。この問題はまた，パレート，モスカ，ミヒェルス，さらにはライト・ミルズに至る，一連の「エリート理論」

なるものを生みだしてきたが、もはや、それらに立ちいることはできない。これについての文献として、さしあたって次のものを指摘するにとどめたい。

T. B. Bottomore, *Elites and Society*, 1964.

(綿貫譲治訳『エリートと社会』, 岩波書店, 昭和40年)

原田鋼『少数支配の法則——政治権力の構造——』(新泉社, 1974年)

95) J. Rovin, *op. cit.*, p. 150

96) *ibid.*, pp. 201~202

(付記…最後に、本稿全体の締め括りとして「むすび」を加える予定であったが、今回は諸般の事情によって、これを割愛せざるをえなかった。記してお詫びしておきたい。)